

2 節でアブラム(後のアブラハム、以下アブラハム)は神さまの約束の言葉に対して問いかけています。アブラハムは神さまの祝福の約束を受けて旅立ち、導きのままに歩んできましたが、いつまでたってもその約束は実現の兆しも見えない中で、神さまの約束を疑い始めているのです。私たちもしばしばこのような思いに陥ります。神さまの言葉を信頼して信仰者として歩んできたのに、恵みや祝福が一向に実現しない、神さまの恵みや祝福など結局何の役にも立たないではないか。アブラハムの問いは私たちの問いでもあります。このアブラハムの問いに、神さまはアブラハムを外に連れ出し、満天の星空を示しました。神さまが圧倒的な力を示され、祝福の約束を繰り返された時、アブラハムは神さまの約束の言葉を信頼したのです。自分の思いや常識によって神さまの約束を測ることをやめて、神さまの言葉を信頼したのです。そこで、神さまはアブラハムと正しい関係にあると認めて下さったのです。ここで、問われているのは、アブラハムがどんな立派な正しい行いをしたかではありません。アブラハムが神さまとどう関わったか、なのです。このように信仰とは神さまの約束の言葉に対する応答、無条件の信頼を意味します。それは、神さまの具体的な言葉に対して自分を明け渡す決断なのです。

7 節以下には、神さまの土地の約束と神さまがアブラハムと契約を結ばれたことが記されています。契約を結ぶ儀式は、当事者たちが引き裂かれた動物たちの間を通る、という仕方で行われます。それは、もし契約を破るようなことがあったら、その人もこの動物たちのように真っ二つに引き裂かれることを象徴しています。17 節には、日が沈み、暗闇に覆われた頃、煙を吐く炉と燃える松明、つまり神さまが引き裂かれた動物の間を通り過ぎたと記されています。この契約の締結で、引き裂かれた動物の間を通ったのは神さまだけです。この契約は一方的なのです。その後のアブラハムの子孫たち、イスラエルの人たちの歩みはまさにこの契約のあり方の通りに進んでいきました。イスラエルの人たちは繰り返し神さまに背いたにも拘わらず神さまはこの契約を守り、イスラエルの人たちへの約束を貫いてたのです。

しかし、アブラハムはここですぐに我が子が与えられた訳ではなく、アブラハムの目に見える現実、何一つ変わっていないのです。私たちの信仰の歩みも、神さまの約束を信頼して、少しも変わらないように見える現実の中で、それでも神さまを信頼して進む歩みではないでしょうか。神さまは、そのような私たちを必ず祝福し、守り、支え、導いて下さるのです。変わることはない神さまの真実こそ、私たちの信仰の根拠なのです。